

夏目漱石とクラシック音楽

(第22回)

ベートーヴェンへの好奇心

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

私は社会医療福祉施設で、子供たちと高齢の方にコンサートをプレゼントしている。ある日、6才の女の子に声をかけてみた。「あなたが知っている外国の音楽家は、誰?」。答えはすぐ返ってきた。「ベートーヴェン!」

今年(2020)はベートーヴェンの生誕250年にあたる。いくつかの一般のインテリ向けの雑誌や婦人雑誌でも、「ベートーヴェン生誕250年特集」という大きな文字が表紙に躍っている。ふだんはクラシック音楽に無関心なのに、ベートーヴェン(1770-1827)は別格なのであろう。

ベートーヴェンの名が日本で知られるようになったのは、いつ頃だろうか。少なくとも明治20年代には、インテリ青年たちには知られていた。彼らはベートーヴェンの曲は聴いたことがないが、名だけは知っていて、これがインテリのステータスでもあった。島崎藤村の『春』に登場する福富はとびきりの音楽通だった。こう熱弁を振るう。

吾国にベトオベンを伝えた最初の人はそのジットリヒである。……音楽狂でないものでも胸が跳おどらずにはいられない。

「ベトオベン」とは、言うまでもなく、ベートーヴェンのこと。福富のモデルは上田敏であった。彼の叔母は、津田梅子を含む5人の女子留学生うちの一人で、欧米視察の岩倉使節団に随行して、1871年渡米した。上田敏の一族は、洋楽通であつた。

た。彼は第一高等学校生の時代から、雑誌『文學界』に音楽批評を書いていた。「ジットリヒ」とは、明治21年から27年まで東京音楽学校で教鞭をとったルドルフ・ディットリヒ(1861-1919)のこと。ウィーン音楽院を卒業したヴァイオリニストで、音楽分野では日本で最初の本格的な芸術家のお雇い外国人教師であった。

さて、夏目漱石の「野分」四章のコンサートでは、プログラムに「ソナタ……ベートーベン作」とある。この小説を書く少し前、明治39年10月28日、漱石は寺田寅彦と一緒にコンサートに行き、来日外国人によるベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタの演奏を聴いていた。

漱石がベートーヴェンに関心を寄せていたことは、彼の明治45年/大正元年(1912)の手帳に残されているフランス語の断片的文章からもわかる。漱石はロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』(1903年作)から、印象的な文章を原語で抜き書きしていた(『漱石全集』第20巻、断片58B)。抜き書きの冒頭部分のみを引用し記すと、

“Personne sur terre ne peut aimer la campagne autant que moi, écrit Beethoven …J’ aime un arbre plus qu’ un homme…”

「私ほど田園を愛する人は、この世にいない」と、ベートーヴェンは書いている。「私は一人の人間より、一本の樹を愛する…」(拙訳)。